表3 症例3 50才女

病日	5	10	15	20	25	30
薬剤	Hetacillin 2.0g × 12.5T					
胆汁	+				-	-
尿	+++	+	+	-	-	-

入院後の経過 昭和41年7月25日入院。入院10日より Hetacillin 1日量 2.0g を4回に分服 12.5日間計 25g 投与し、投薬終了後14時間で胆摘術を施行した。菌検出状況は表3のごとくである。

術前検査で尿、血液、肝機能等に異常を認めず。

胆嚢造影では結石像を認めず、またヨーク錠による収縮良好で、異常は認められなかつた。

手術所見 胆嚢はわずかに大網と癒着している外はさしたる癒着もなく、またうつ滞、炎症所見等を認めず、小結石1コを触れた。内容は黄褐色胆汁と緑色米粒大の結石1コを認めた。

胆嚢内容液を培養するに全く菌を検出せず。また結石をそのまま、次いで砕き胆汁増菌培養を行なうも菌を検出しなかつた。

胆嚢内液の Hetacillin 濃度は 8.71 mcg/ml であつた。

総括並びに考察

2例の腸チフス保菌者と1例のパラチフスB保菌者に Hetacillin を投与して観察した結果、前述のごとくいずれも尿および胆汁中のチフス菌 パラチフス菌が陰性となつた。この成績は本剤を胆道系持続排菌者に内服せしめることによつて菌消失が期待できることを示している。しかし AB-PC 投与の場合に経験されていることは、その内服によつて、いつたん菌の消失をみても後に再び排菌をみるに至るものが多いことである^{7,9)}。かかる場合ほとんど総べて胆石の存在が確認されており⁸⁾、胆石を有する保菌者では化学療法のみによる完全治癒は困難なことが多い。従がつて Hetacillin の場合にも同様なことを考慮する必要がある、症例2のような胆嚢造影陰性で手術を行なわなかつた例ではさらに長期にわたる観察の必要なことはいままでもないが、注目すべきことは Hetacillin の内服によつて、たとえそれが一時的であつたとしても、全例ともかなりすみやかに尿および十二指腸ゾンデ採取胆汁中の菌が陰性化したことであり、症例1, 3にみられたように本剤内服後摘出した胆嚢胆汁にも全く菌を証明せず、Hetacillin 濃度もそれぞれ16.35

mcg/ml, 8.71 mcg/ml の高濃度を示したことである。かかる事実は胆道系保菌者の化学療法剤としての本剤に大いなる期待を寄せ得るところであるが、症例1の摘出胆石の菌培養結果が示すように、ある程度の大きさをもつ胆石ではその中に存するチフス菌、パラチフス菌に対して薬剤の作用が及び難く、このような症例が再排菌をきたすものと思われる。いつぼう症例3のような胆石がきわめて小さいものでは胆石中の菌も死滅し、化学療法のみによる完全治癒も望み得るのではなからうか。

結 語

1. 腸チフス、パラチフス保菌者3例に Hetacillin の内服投与を行なつたところ、いずれもすみやかに尿および十二指腸ゾンデ採取胆汁中の菌は陰性化した。

2. そのうち2例に胆摘術を行なつたが、摘出胆嚢内液は高濃度に Hetacillin を含有し、全く菌を検出しなかつた。しかし摘出胆石の小豆大ないし小指頭大のものからはチフス菌を検出した。

3. Hetacillin による保菌者の治療に当つては胆石の存在とその大きさに留意することが必要であり、化学療法の限界がこの辺に存在するものと考える。

本論文の要旨は第10回日本伝染病学会中日本地方会シンポジウムの一部として発表した。

胆摘術については当院外科 渡辺三喜男、小野辰久両博士に、また胆汁内濃度測定は神戸大 小林稔博士の厚意によつた。共に深謝する。

主 要 文 献

- 1) 平石 浩: Medical Corner 32, 19, 1966
- 2) R. SUTHERLAND, O. P. W. ROBINSON: Brit. Med. J., 2, 805, 1967
- 3) 生長良子, 山川信子, 吉田弘嗣, 中沢昭三: Chemotherapy, 15, 4, 1967
- 4) A. GOUREVITCH, J. A. BACH: Microbiological Properties of Hetacillin, Bristol Laboratories, N. Y.
- 5) P. H. AZIMI, H. G. CRAMBLETT: Antimicrob. Agents & Chemoth., 116, 1966
- 6) C. SCIOLI, G. GIUSTI: Clinical Medicine, 74, 69, 1967
- 7) 平石 浩: 日伝染会誌, 41, 170, 昭42
- 8) 安原美王磨: 日伝染会誌, 41, 203, 昭42
- 9) 山本琢三, 角田沖介, 村田夏樹: 日伝染会誌, 38, 343, 昭39

THERAPEUTIC USE OF HETACILLIN

TAKUZO YAMAMOTO, OKISUKE TSUNODA & NATSUKI MURATA

Kobe Municipal Central Hospital

The authors report 3 cases of typhoid and paratyphoid carriers treated with hetacillin. In two, cholecystectomy was performed to investigate the bacilli in the gallbladder. To investigate the problem further, an attempt was made to isolate the bacilli from gall-stones.

The authors summarize their experience gained in the treatment of 3 patients with hetacillin and consider that the chemotherapeutic effect of both hetacillin and AB-PC depends on the size of stones in the gall-bladder.